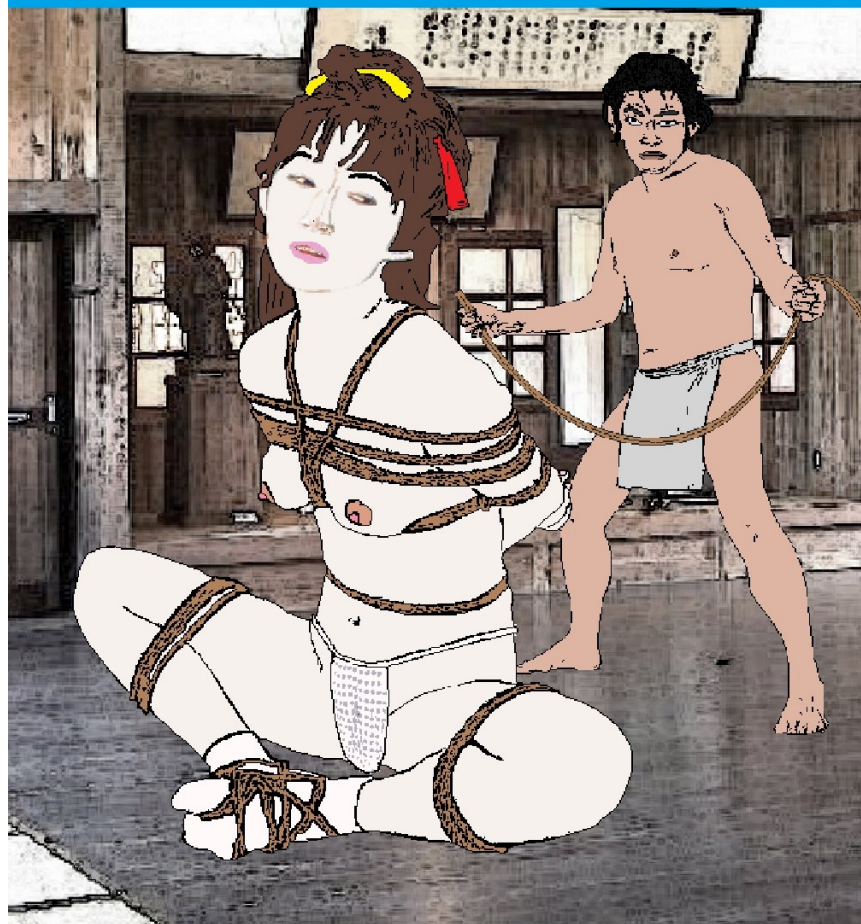


# 悲剣肌風 模索編

死地で復活する女人剣



濠門長恭 著

卷之二

登場人物

神崎弥恵

正安の妻となつて柴田家とは縁を切り、正安に嫁ぐ。  
偶然に発動した秘剣を再現せんと模索中。

神崎正安

神崎古流六代目。弥恵を娶るが、少年時代の苦い記憶に妨げられて新妻を女に出来ず苦悩している。

柴田七郎

姉の援けを得て父の仇を討ち、柴田家の世襲を認められただけでなく、若君の小姓（次代の重役）に抜擢される。

奎助

柴田弥一郎（姉弟の父）に徴用されていた中間。

二

小島要介

柴田弥一郎の政敵、小島政衛門の嗣子。主君の肝煎りで弥恵と婚約するが、仇討で白紙に戻った後も弥恵の身体を食らうとして返り討ち（？）に遭う。未だ、弥恵への未練を残している。

注記

本作品は『悲剣肌風（巻之一）発動編』の続編です。  
本編だけで完結していますが、前作を併せてお読みくだされば、よりお楽しみいただけると思います。

## 目次

一、	不発	四
二、	位牌	十三
三、	緊縛	二十四
四、	呵責	
五、	密談	
六、	迂闊	
七、	肌風	
後書き		

一・不発

暮れ六ツまで半刻。窓という窓には簾が下ろされて、道場の中はすでに薄暗い。弥恵の裸身だけが、ほの淡く輝いているように見えた。しかし、その白い肌には幾筋もの線条が走っている。

弥恵は禪一本の姿で右半身に愛用の小太刀みぎはんみを構えているのだが、紺に染めた手拭いで目隠しをしていた。その見えない目を、二間の向こうに立って二尺六寸を八双に構えた正安に向けている。刃引きではなく、どちらも真剣だった。

正安が右へ動きながら、じりじりと間合いを詰めていく。弥恵も左足を引きながら身体の向きを変えていく。肌風——相手の斬撃を前もって肌に感じて対応している。のではないと、弥恵自身が痛感している。視覚を奪われたぶんだけ聴覚が研ぎ澄まされている。蟬

しぐれの中から、正安の足裏が床を擦る音、かすかな衣擦れ、息づかいなどをかろうじて聞き分けて、およその動きを察知しているだけだった。弥恵は正安の位置を正確にはつかんでいない。その証拠に、正眼に構えた切っ先は正安の顔から右へ二寸ほどそれている。

正安の動きが一瞬、止まった。

（来る……！）

弥恵は右へ大きく踏み込んだ。身体をまわしながら小太刀を左へ薙ごうとする寸前。

ぶうん、かしやつ。

「ああつ……！」

弥恵は小太刀を取り落とし、両手で胸をかかえて床に膝をついた。斬撃そのままの勢いで乳房を峰打ちにされたのだった。

「ぐ……」

息が詰まって、身じろぎひとつできなかった。

「すまぬ。峰を返すまでは本気で斬りにいったのだ」

弥恵が、かすかにうなずいた。

「それでも……だめでした。弥恵には、先生への甘えがあるようです」

左へ回り込まれたからには、正安の斬撃は左から来る。裏をかいたりはしないだろうという予測が、弥恵を大胆に右へ踏み込ませていた。正安が弥恵の反撃をかわすだろうことも、けっして命にかかわる傷を自分に負わしたりしないだろうことも、弥恵は予測していた。正安への信頼であり、甘えであった。

肌風は——もし、そんなことが出来るとしても——生死の境目でしか発現しないのではないか。火事場の馬鹿力のようなものだ。数日の試みのあとで、正安はそうのように言った。いくら真剣をもって対峙しても、相手を信頼して、そのうえ甘えていては、発現のしようもない。

正安が弥恵に目隠しをさせたのも、危機感をつのらせるためであった。と、同時に。肌風がまことに肌の感覚に由来するのであれば、

目が見えていてもいなくても変わりがなければ  
もしれないと考えてのことだった。

正安の試みは失敗に終わったと、いつてよ  
いだろう。

「今日は、ここまでとしよう」

正安は膝をついて、まだうずくまっている  
弥恵の肩を背後から抱きすくめた。

「痛むか？」などと、わかりきったことは訊  
ねない。

正安は左手で目隠しをはずしてやり、その  
手を前にまわして、乳房を押さえている弥恵  
の手に自分の掌を重ねた。

弥恵の腕先にも二の腕にも肩口にも、青黒  
い痣が刻まれている。身体の陰になっている  
が、脇腹にも同じような峰打ちの痕が二筋三  
筋と走っていることを、正安は知っている。  
すべて、正安のつけた傷だった。

刃が肌に触れる一尺手前で峰を返して渾身  
の力で腕を引き止め、一寸どころか一分たり  
とも刃を引いたり滑らせたりはせぬから、皮

一重も斬れてはいない。しかし、柄を加えれば長さ三尺余の鉄棒で殴りつけるのだから、無事にすむはずがない。骨が折れたり筋を痛めたりしていないのは、正安の技量によるものだった。それでも。帰郷したその日から始めて、内輪の祝言の当日だけは休んだが、今日まで十五日のあいだに弥恵の肩から腰までは痣だらけになっていた。

ごくつと、正安が生唾を呑んだ。弥恵手の内側に我が手をすべりこませて、少女めいた硬さを残す乳房を掌に包んだ。

「まだ痛むか？」

その言葉にこめられた言外の意味を、弥恵は察した。そして、首をわずかに振った。

「もう……」

三日前に初めて道場で押し倒されたときは、驚きもしたし呆れもした。

「神聖な道場でなど……」

「男と女がひとつになって新しい命を創るのじゃ。これほど神聖なことが、ほかにあろう



か」

押し切られてしまったのだが、正安に不都合があつて、構合は遂げられなかった。

このとき限りのことではない。祝言の当夜、翌日、一日おいて四日目と、構合はかなわなかったのだ。正安はちゃんと抜き身を構えるのだが、いざ討ち入りの門前でへたり込んでしまう。さらに二度の虚しい夜をかさねて、ついには三日前に道場での仕合を試みたという次第だった。

そういったときの正安は、可哀想になるくらいしよげ返る。生娘にはわからぬ男の問題とは、このことだったのかと――しかし、弥恵の正安への信頼と思慕はけして揺るがなかった。ひとつには、ただ正安がその場で意気消沈するだけで、八つ当たりなどはせず、半刻もすればいつもの神崎古流六代目宗主に立ち戻っているからであつた。正安の言葉を借りれば、なによりも神聖な行為における男の役割を果たし得なかった屈辱がどれほどのも

のであるか、生娘の身には想像もつかないそのことが、弥恵にはうつすらと理解できるような気がしている。というのも。正安の屈辱の原因が自分にありはしないだろうかという不安が湧いたからだ。仇討の道中で行き会った海女の姉とは比べものにならない小ぶりの乳房と薄い尻。自分に女としての魅力が乏しいせいではないのかとさえ思い悩んだ。

「……………」

痛がるそぶりを見せぬかと気をつかいながらも、弥恵の乳房を揉む手の動きが、すこしずつ強くなっていく。正安は右手を弥恵の腰におろした。禪をゆるめて、するると股間から引き抜く。弥恵もわずかに尻を浮かせて神崎の動きに協力する。

まだ明るいうちから最後の布まで取り去られておおむけに押し倒されて。弥恵は両掌で顔をおおった。両脚をそろえて伸ばしているが、夫である正安の行為を妨げてはならぬと——耳年増とはいえ閨の作法までは知らぬ弥

恵は、顔を真つ赤に染めながらも、もつとも恥ずかしい部分を無防備に晒している。

正安の立ち上がる気配があつた。せわしな  
い衣擦れの音。指の隙間からうかがうと、正  
安の股間には懐剣（太さは鞘ほどもある）が  
上段に構えられていた。早変わりの絡繰を教  
える代償として弥恵の肌を要求した座長の逸  
物よりは、ひとまわり小ぶりだった。危な絵  
に比べれば、大人と子供ほどの違いがある。  
小さいということが正安の不能と関係してい  
るのだろうか、弥恵は疑っているのだが。  
実のところ、懐剣ほどの長さ（と、鞘ほどの  
太さ）というのは並みの男の持ち物より大き  
い——ということを知らなかった。

道場の床板がわずかに軋んで。両膝の間に  
手を差し入れられ、腿を左右に開いて膝を立  
てさせられた。正安の息が顔にかかった。間  
近に正安の肌の温もりを感じた。

（こたびこそは……）

はしたないと思いつつも、弥恵はそれを待

ち焦がれている。構合ってこそその夫婦であり、現代でいうところの素股を許した座長の痕跡を拭い去ることができる。

しかし。ため息とともに正安が身を起こす気配があつて。

「……すまぬ」

苦渋に満ちた低いつぶやきを聞いた。弥恵は無言で脚を閉じた。なんと言つて夫を慰めればよいか、わからなかった。

## 二・位牌

肌風を再現する試みはいったん休み、閨でもただ布団をふたつ並べて寝るだけの夜が四日つづいた。それはふたりの日常にあつて、ささやかな変化でしかなかった。

午前中は正安が門弟に稽古をつけ、弥恵は奥向きの用事を片付ける。道場の清掃は門弟がするから、畢竟は男と女と、ふたりだけの所帯。以前から雇っていたかよいの女中には暇を出した。

午後になると、弥恵ともうひとりの高弟とで、新規の入門者に基礎の稽古をつける。この十日あまりのうちに八人が神崎古流の門を敲いた。名誉の仇討を成し遂げた柴田七郎が学んだ流派として名声を高めたのは無論だが、その七郎を援けた姉が使った秘剣——あえて晒した素肌に太刀風を感じて身をかわすという肌風が、人びとの興味を惹いた。というよ

りも。女人の裸で相手を惑わす卑劣な奇策と誹謗される先手を打って、正安が意図的に流布したのだった。

その日の五ツ半（午前九時）を過ぎて、十日ぶりに柴田七郎が道場へ稽古に来了。

「ご無沙汰をいたしました」

柴田家を嗣いだ七郎は、すぐさま若君の小姓に取り立てられた。いずれ若君が藩主になられたあかつきには、小姓の何人かは重職に任ぜられる。殿様は四十七歳、若君は二十五歳。いずれどころか、数年先の話かもしれない。あまり早すぎでは、十四歳の少年はかえって立身出世の機会を得られないかもしれないのだが。

侍としての作法は父から厳しく仕込まれ、城内でのしきたりについても教え聞かされてはいたが。まだまだ不十分だった。世嗣にお側近く仕えるともなれば、格式だの先例だので雁字搦めとなる。登城すれば先輩たちの後ろで一挙手一投足を見習い、非番の日は年配

の誰彼に教えを乞う。そのうえに、是非とも武勇伝をうかがいたいと、遠戚の縁戚からまで宴席に招かれる。

稽古にかようどころか、姉の嫁ぎ先へ挨拶に立ち寄る暇もない日々がつづいていたのだった。

「どうにか、身の回りも落ち着いてきました」  
これからは一日おき、非番の日には稽古にかようつもりだと、七郎が言う。

「世間の噂の、せめて半分くらいには強くならねば、面目が立ちません」

「十日の余も稽古をしていなければ、腕も落ちたであろう」

「朝の素振りは欠かしておりません」

七郎は見所の前から下がると、稽古着に着替えて竹刀を握った。道場では三組が打ち合っているが、まだ二間四方くらいが空いている。

「保坂殿、お相手を願えますか」

四分六で分の悪い十二番札に向かつて、七

郎が頭を下げた。

「よろしくお願い申す」

三十に手の届こうかという小柄な男が立ち上がった。十四歳の少年にしては大柄な七郎とは、ほぼ同じ背丈。

「いざ」

互いに正眼に構えて対峙して。剣先が触れ合うなり保坂が右小手を空けたが、七郎は誘いに乗らず、反対側へ大きく踏み込んだ。

「えいっ！」

びしつと乾いた音を立てて、七郎の竹刀が相手の左肩を打った。打撃は軽いが、じゅうぶんに残心のある一撃だと、見る者は見る。

保坂は右へ変わりながら反撃の勢いを見せたが、すぐに竹刀を引いた。これが真剣で七郎が本気で斬り込んでいたなら、保坂は致命傷を負っている。

「まいった。途轍もなく強くなられたな」

言われても、七郎に実感はない。素振りの迅さと正確さとは、三日に二回の割で道場へ



稽古にかよっていた頃より落ちているような気がしている。ただ。相手の小手が空いた瞬間に意図を察知して、考えることなく逆を衝いたのは、自分でも意外な動きだった。

「三年分の修業を積んだわけじゃな」

にこりともしないで、正安が言った。人ひとりを斬るのは道場での稽古の三年分に匹敵するといわれている。正安は七郎の進境を認めたが、それが仇討とはいえ殺人のうえに成り立っているのだから、手ばなしで褒めるのもはばかられる。正安の無表情は、そう語っていた。

「では、俺も腕を試させてもらおう」

八番札の荻野目が立ち上がりとした。

「やめておけ。三年分も身体が大きくなったわけではない」

正安の言葉に、何人かが笑った。荻野目は道場随一の巨漢だ。七郎とでは、まさしく大人と子供の仕合になる。

——その後、七郎は十番札と互角に戦い、

十四番札は余裕をもって受け太刀にまわつてから胴をじゅうぶんに斬った。正安は七郎の札番を十三に繰り上げた。

「非番の日はかようと言うていたが……」

午の刻前に、来ていた二十五人の門弟一同で道場を拭き清めて、その日の稽古が終わった。七郎は残つて、昼餉を供にした。この場では、正安は七郎の師であると同時に義兄でもあった。正安も、くだけた物言いになっている。

「書付のほうは、どうするのかな？」

「役向きのこととは違います。誰彼となく押し掛けるわけにもいきませんから」

小姓勤めをしながら、忙中に閑を盗む手口も先輩に教わったと、七郎は歳相応にいたずらっぽく笑った。その盗んだ閑に、まずは御蔵番と昵懇になるつもりだと、これは真顔で言う。

「父のことです。受けた金品は藩への献上と

見なして、そのように処理をしたと思いますから」

「ふむ……いきなり打ち明けたりはするなよ。家宝のひとつが見当たらぬ。もしや殿様に献上したのではないかと口実を設けて、出入帳を見せてもらうのがよからう。あくまで、内済にな」

いつか、ふたりの話し声は小さくなっている。算盤家老とか依怙の沙汰が過ぎるとか陰口をたたかれながら、しかし父は清廉潔白だったと姉弟は信じている。その父が、煙草株座から締め出されている商人たちから賄賂を受けていたはずがない。

しかし。

大倉屋 乙丑如月 ぎやまんだら

花菱屋 乙丑卯月 京美人

山都屋 丙寅長月 黄金拵登竜噴水鉢

大倉屋 丁卯睦月 すてろじれほおはる

この謎めいた書付を見つけたのは、仇討を果たして帰参した翌々日のことだった。あら

ためて簡素な法要をしてから、仏壇に祀ったままにしてあった戒名札の供養を和尚に託した。父を先祖の霊と一緒に祀るために、表に戒名を、裏に俗名と没年と享年を書き写した小さな木札を収めようとして回出位牌くりだしを開けたとき。

「……………」

木札と同じ大きさに折りたたまれた紙片を、七郎が見つけた。広げると、先の四行が記されてあった。弥恵と七郎はむろん、叔父の柴田満三郎にも、なんのことだかわからなかった。

「他言無用がよろしかろう」

正安が七郎の手から紙片を取りあげて、元どおりに折りたたんでから返した。

「形見分けについての遺言じゃ。このような仕儀になるとは思わなんだ頃のものゆえ、遺言どおりに致すのは不都合がある。弥一郎殿の思いを裏切らぬ形で、あらためて七郎殿が差配いたす。不平不満の種を撒かぬためにも、

この書付は余人に見せぬ」

内輪の法要とはいえ、使用人もいれば父に忠実だった下役もいる。その者たちへ向けた言葉だった。奎助がきな臭い顔をしたのに弥恵は気づいたが、二日後に迫った祝言や、その後のことに気が向いていて、深くは考えなかった。

正安、弥恵、七郎の三人だけになってから、書付の謎を話し合った。

書付にある乙丑は二年前である。この二年間に父が受けた賄賂の品を書き残したのではないかというのが、三人とも勘繰りだった。

農事方家老の柴田弥一郎が賄賂を贈られるとしたら、それは煙草株座にからんでのことだろう。煙草は生活に不要の嗜好品である。だからこそ、味わいのわずかな違いで値段は何十倍も違ってくる。品薄の銘柄は高騰する。増沢煙草には独特の香りがあって、吸ったときの酔い心地にも定評があった。しかも、柴田弥一郎は意図的に生産量を抑えさせていた

し、極上品を京や江戸に献上して箔付けにも抜かりがない。煙草株座に新規参入できるなら、千両でも安いものだ。とはいえ、小判ではあからさまなので、高価な贈り物の形をとったのだろう。

それとも、父はもつとたくさんの賄賂を受けていて、珍奇な品だけを書き留めたものか。

『ぎやまんだら』とはギヤマンの細工物と判じられるし『黄金拵』は文字通りの黄金だろう。『京美人』は京人形のことか。生き人形とも勘繰れるが、これは貰ったほうも始末に困る。『すてろ』何とやらだけは皆目見当もつかないが、ほかの三品同様の飾り物と思われる。

しかし、それらのいずれも、弥恵も七郎も目にしたことはない。すぐに納戸を調べたが、それらしい物はなかった。

「これらがどういう物で、なぜに商人から受けたのか、どう処分したのか。是非にも知りたいと思います」

父の潔白を信じるからこそ、真実を究明し

たい。その思いは、弥恵も同じだった。

「墓をあばくのが親孝行……か」

しばらくの沈黙の後、正安がぼつりと言った。

「斬られに行くのか」と、別れの挨拶に来た弥恵につぶやいたのと同じ口調だった。しかし、そこから先の言葉はなかった。

### 三・緊縛

この日は新弟子たちへの教授がなかったのだ、七郎も長居をして、道場を辞したのが未の刻（午後二時）過ぎ。洗濯物を取り込むにも、夕餉の支度を始めるにも、まだ一刻半はある。

肌風の試みは中断していたが、合間合間にふつうの稽古はつづけている。正安への掛かり稽古だから、弥恵の腕は日に日に上がっている。三年分の稽古の上に最上の稽古を重ねて、三羽鳥の中で一頭地を抜いてきたのであるまいか。

「今日は、下帯で……な」

稽古着に着替えるために寝所へ行こうとした弥恵の背中に、正安が声を掛けた。

先生は、またなにか工夫を考えつかれたのだろうか。今日こそは、肌風を再現したい。弥恵の心には焦りがあつた。



藤原数馬との闘いで、たしかに弥恵は通常とは違う感覚の中にいた。彼我の動きがおそろしく緩慢で、つまりは常になく思考が迅かった。そして、たしかに斬られる前に痛みのような肌の引き攣れを感じて、それを避けて動いた。ように思える。しかし、それらはすべて——死を覚悟したがゆえの、尋常でない心持ちが惹き起こした錯覚、だったのかもしれない。そこに、弥恵を救いたいがための正安の方便が偶然に合致したに過ぎないのだとは、考えられないだろうか。

もし、そうであれば。正安は人々を欺いたことになる。方便を嘘にしないためには、肌風を再現してみせなければならない。

とはいえ。今日も徒労に終わって、肌身に瘡が増えたただけだったとしても。弥恵に失望だけが残るのではない。ただ師弟の間柄だけであるなら、正安もこんなに厳しい打撃は加えない。身体の結びつきに替わる絆。はつきりと意識まではしていないが、弥恵の心の奥

にはそんな思いがひそんでいるのだった。

弥恵は五尺（鯨尺の六尺は、細い女の身には長すぎる）の晒し布を持って道場へ行き、そこで裸になってすっかり慣れてしまった手つきで下帯を締めた。待つほどもなく、正安が姿を現わした。

（……………）

正安も下帯一本の裸形だった。手には刀でなく、縄束を持っている。

「今日は肌風ではない。厭ならやめるが……おまえを縛らせてくれぬか？」

正安の声は囁れていた。

「捕縛術の稽古ですか？」

武術百般を号する神崎古流には、むろん捕縛術も含まれている。弥恵は、まだ習っていない。その伝授だと考えるのが、ふつうの思考だろう。

「む……そうではない。ないが……正安、後生の頼みだ」

論旨明快な正安にしては、はなはだ曖昧な

物言いだった。それにしても、後生とは。正安の顔は真剣そのものだった。いや、切羽詰まっているときえ見えた。

正安は剣の師であるばかりでなく、命を拾ってくれた恩人（死を妨げた人、という恨みはすでにない）でもあり、まだ身体の結びつきはなくても、きちんと祝言をあげた夫でもある。疑問はあつたが、弥恵にためらいはなかった。

「お考えのとおりになさってくださいませ」  
弥恵は正座したまま、正安に背を向けた。

縛られるのは背後から——これは一瞬で着物を替える早業を見きわめるために何度も観た芝居で覚えた、捕囚の所作だった。

正安の足音が背後に迫って、止まる。弥恵は手首をつかまれて背後へねじあげられた。

「あ……」

二の腕を水平にして重ねられた手首に、二重に折られた縄が巻きつく。縄尻が左右に分かれて、二の腕も縛った。背中に菱形を描く

形で首の後ろに縄が留められ、そこから首の前にまわる。四本の縄が乳房の谷間で結び瘤を作ってから下へ引かれて、臍の上で胴を巻く。その縄尻が身体の正中線を下りている縄を二本ずつ絡めて左右に引き絞られる。

「くう……」

縄で菱形に腹をくびられて、弥恵の口から自然と息が漏れる。

縄はさらに、二の腕を縛った縄に絡められ、喉元から乳房の間で縦縄を左右に引き絞った。その要所要所に留め結びが作られる。

「神崎古流捕縛術のひとつ、小目菱縄<sup>こもくひしなわ</sup>」

弥恵は上半身を厳重に縛された。芝居でトヨが縛られたより、ずっと複雑な縄掛けだった。しかし、それほどの圧迫はない。乳房が菱形にくびり出されて奇妙な疼きを感じるが、不快とばかりもいいきれない。しかし、縄目に逆らって身体を動かそうとすると、たちまち上半身全体が締めつけられる。

正安の手が弥恵の膝を割った。

「あ……」

胡坐を組んで上体を折られたトヨの姿が、  
弥恵の脳裡に甦った。

「ぐ、ううう……」

そのとおりの形にされると、想像していた  
よりはるかに苦しい。すべての縄が柔肌に食  
い込んで、息をするのもままならなかった。

ごろんと——身体を起こされて柱に縛りつ  
けられた芝居とは違って、あおむけに転がさ  
れた。たちまち、弥恵の裸身が濃い桃色に染  
まった。大股を開かされた、その中芯を真上  
に向けて晒す、芝居よりもさらに恥ずかしい  
形だった。背中に敷いた手首の痛みなど、も  
ののかずではない。

肝心の所は隠しておったではないか——正  
安の声が聞こえたような気がして、それだけ  
が救いだった。それなのに。腰に巻いている  
よこみつ横褌に正安の手がかかった。下帯の端は結ん  
でいるのではない。左右の横褌にねじり絡め  
ているだけだ。それが、ひと巻ひと巻ほぐさ

れていって。正安の左手が弥恵の尻を浮かせると。

「あああつ……！」

しゅるるんと大きな衣擦れの音とともに下帯を引き抜かれて、さすがに弥恵は悲鳴をあげた。しかし、まだ正安の手におのれを委ねていた。儂にだけは、そこを見せてくれぬか——その約束を果たしているのだと、目を固く閉じながら弥恵は自分に言い聞かせている。

正安の立ち上がる気配。弥恵はおのれの秘肌に突き刺さる視線を、はつきりと感じた。

視線にあぶられて、そこが燃えるように熱い。

弥恵の中芯を見つめる正安の瞳に情欲の色はなく、むしろ嫌悪さえ浮かんでいる。

「やはり、これか……」

数呼吸の後でつぶやくと、弥恵をそのままにして道場から出て行った。

その足音を耳にして、弥恵は眼を開けた。

見えるのは、雨漏りのにじんだ天井板ばかり。

蟬の声が道場を包んでいる。

弥恵が不安を覚えるいとまもなく、正安は戻って来た。胡坐を組んで二つに折られた弥恵の尻の間に座った。

「ひっ……」

中芯の亀裂を取り巻くように生えた纖毛を逆撫でされて、弥恵は身を固くした。それから、耳を疑った。

「すまぬが、ここを剃らせてもらうぞ」

「せんせい……？」

祝言をあげて以来、ふたりきりのときには稽古の場を除いては意識して使わないようにしてきた呼び方だった。弥生は正安の意図に不審を持った。

「厭か……？」

ふっと、弥生の脳裡に髭面が浮かんた。芝居小屋の座長——というよりは、あの一族の長。彼も、いま正安が見ているのと同じ光景を目にしている。そして、弥生の秘貝にこすりつけられた、彼の怒張。そこから生じた妖しい感覚。その行為は媾合も同然だったと思

っている。その秘事を、弥恵は生涯隠しとおすつもりでいる。

女にとって、髪を切るのは過去を断ち切るも同然の一大事である。ならば。けっして人目に晒してはならない部分の纖毛は、それ以上に大切なものではなからうか。それを剃り落されるのであれば――正安の手で、過去を清めてもらうことにはならないだろうか。

考えようによつては、人前で下帯一本の裸身を晒すよりも破廉恥な行為ではあるけれども。弥恵はどうかして、おのれを納得させたのだった。そして、また――求めを拒めば取り返しのつかないことになりそうな予感があつた。それほどに、正安の声には切羽詰まつた響きがある。

「お考えのとおりになさってくださいませ」

長い沈黙のあとで、弥恵がつぶやいた。

無言のままに、正安が動く気配。弥恵は、股間にひんやりした感触を覚えた。纖毛が水で濡らされていく。そして、同じように冷た



いが、固いものが肌に触れて。

しよりっ……剃刀が肌の上を滑って繊毛が刈り取られていくのを、弥生は肌に感じた。

正安の作業は執拗につづけられた。ただ下腹部を剥き出しにするだけではなく、盛り上がった秘貝の谷底にまで刃を当てた。

蟬が鳴き止み、また鳴いて休み、三度、四度と繰り返されて。最後に、水に濡らした手で拭いで股間全体を拭われた。

正安が立ち上がった。六尺ふんどしの前が、大きく膨らんでいた。いつになく悠々とした仕種で、下帯を解いた。つぎの瞬間にも萎縮せぬかと恐れている様子が、まるでない。

（まあ……！）

足元から見上げているせいだろうか。正安の怒張が、座長のそれと同じくらいに思えた。

海老責めに縛られてあおむけに転がされたままの弥恵に、正安がおおいかぶさってきた。

正安は左手で上体を支えて、右手を股間に這わせる。

「あ……ん」

鮑の縁をなぞられて、弥恵は吐息を漏らした。正安の愛撫に馴らされ始めてはいるが、とりわけて今日は敏感になっていた。そして、おびただしく潤っているのが自分でもわかった。裸で縛られて、晒されて、剃られて。羞恥につぐ羞恥の極みで、おのれが女であることを思い知らされたせいなのかもしれない。

「くうう……あつ」

吐息が、はつきりと控えめな喘ぎ声に変じていく。

正安の右手が弥恵の股間からはなれて、木刀のように硬くなっている魔羅を握った。

「いくぞ……」

先端を弥恵の秘貝にあてがって、ぐうっと腰を沈める。

「んっ、んんん……」

弥恵は奥歯を噛み締め唇を引き結んで、悲鳴をこらえた。引き攣れるような、焼けつくような、破瓜の痛み。その奥には、ようやつ

と正安と真の夫婦めおとになれたという喜びがあった。

——弥恵を気づかっただのか、それとも妻を女にして我も男として甦った喜びからか、正安はごく短時間で精をはなつた。

「ようやくに、できた。四十二年目にして、ようやく多津枝殿の呪縛を断ち切れた」

しみじみとつぶやいてから、正安は弥恵の縄をほどこにかかった。ほどこながら、●五の時からこの方、男としての機能はありながら女性と媾合えずにきた経緯を打ち明けたのだった。

